



月報

No. 436
2016年
9月

日本キリスト教団
茅ヶ崎香川教会
茅ヶ崎市香川1丁目 34-35
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

説教 『 黙り続ける主イエス 』

マタイによる福音書 26章57節～68節 小河信一 牧師

主イエスが最高法院で裁判を受けるというのは、夜の場面です（マタイ 26:31,34、27:1）。そもそも、このような重大な裁判が夜間に開かれること自体、異常でした。

夜のしじまの中で、人々はずっとおしゃべりを続けていました。それは、大祭司カイアファの屋敷に出入りする人群れのざわめきから、主イエスの神冒瀆を告発する証言が継起し、最後には「言い当ててみろ」とのゲーム感覚の愚弄^{ぐろう}へと至るまで、人々はしゃべりっぱなしでした。

その一方で、主イエス・キリストは……

マタイ福音書26:63——

イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」

マタイ福音書26:64——

イエスは言われた。「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言うておく。

あなたたちはやがて、

人の子が全能の神の右に座り、

天の雲に乗って来るのを見る。」

K.バルトの言う通り、主イエスは、人間的な賢さによってではなく、神の賢さによって、黙りもし、語りもされたのです。神の御心に従って自在

に、黙する時と語る時が巡っている（コヘレトの言葉3:7）、というのはまさに信仰者の手本です。主イエスが語られている事も、旧約聖書に基づいた神の言葉そのものです。

では、沈黙すべき時には沈黙し、語るべき時には語っておられる主イエスの御子らしい振る舞いに直面しながら、おしゃべりを続けている人間はいったいどんな罪を犯しているのでしょうか？

マタイ福音書で「イエスは黙り続けておられた」という表現はこのみです。一度かぎり刻まれている、この主イエスの御姿によって、闇の中にある人の罪や弱さが照らし出されます。そこで序論として、私たちの信仰生活における「沈黙」について考えてみましょう。

キリスト教の礼拝学事典を見ると、「沈黙」の項の英訳には、**silence**（沈黙）が添えられています。それに加えて、**meditation**（黙想・^{めいそう}瞑想）という英語が付けられています。日本語の「沈黙」に対して、**meditate**、すなわち「^{じゅっこう}熟考する」との意が込められているのは、要注意です。

聖書において「主なる神の御前に沈黙せよ」（ゼファニヤ書1:7 他に詩編37:7）と招かれている「沈黙」は、ただのんびりと穏やかにしているというとは違います。心を尽くし魂を尽くして、精神を高めて「熟考している」というのが、真意です。

ところで、ドイツの文豪・ゲーテが31歳の時に作った「旅人の夜の歌」という詩があります。その6行目「小鳥は森に沈黙している」（この詩は全体で8行詩行から成ります）に関して、^{おしおたかし}小塩節氏は、このように解説しています。

「6行目から急に聴覚にかわる。視覚をとおして、いままで感覚はもっぱら外にむかって流れ出していたのだが、聴覚によって**注意力が突如うちがわに向かって激流する。**」

「詩人の感覚は、最後におのれ自身の内心の静けさに耳をすまそうとする。」

被造物が静止すると共に、詩人の心は、**突如うちがわに向かって激流する注意力**にみなぎりました。そして詩の最後に、ゲーテならではの**新境地**がつづられました。

「待つがよい、やがて
おまえも^{いこ}憩うのだ」

若い人は時に、人は恋に事業に^{あせ}焦り^{はや}逸ります。31歳のゲーテは山の奥で「待つ」ことのできない人間の苦悩を背負い、「熟考し」、共に居ます神にあって「憩う」ことを望み見たのです。沈黙の内に熟考し、そして永遠の内に憩うという魂の平安が、ゲーテの人生を覆っていたことが分かります。

「沈黙する」というとまず、人間の活動が停止することを連想しますが、上の例からも分かる通りに、「沈黙する」の真意は、全身全霊をもって何かを考え抜いていると捉えられるでしょう。

ところで本日、オリーブの会で、「土曜日の夕べの祈り」2編を、イエツク・ツィンク『祈りを求めて』（ヨルダン社）から学びます。ツィンクはその書物の冒頭で、祈りの出発点として「^{だま}黙ること」を解説しています。「語りかける」や「叫び求める」ではなく、祈りの母胎として「黙ること」が置かれています。そして牧師であるツィンクは、次のような生活体験を語っています。

「数年前から私は、すぐ目の前が海である小さな家で休暇を過ごすことにしています。…（中略）… この早朝の時刻には、ボートの外板に小さな波がひたひたと寄せる音以外には何の物音も聞こえません。…（中略）… その後、仕事と多忙とが戻って来ても私たちは思い出すことでしょう。目を閉じれば——仕事中でも——あの、ボートの外板にひたひたと寄せる波の静かなささやきが聞こえて来ることを。」

今、何を祈るべきか、ツィンクは彼の愛して止まない「静かな沈黙の時」に立ち帰って、祈りの言葉が生まれて来るのを待っていたのでしょう。

ゲーテとツィンクによって、私たちは熟考している沈黙や祈りへと向かう沈黙について教えられました。さてそれでは、主イエスがどのように「黙り続けておられた」のか、聖書を読んで確かめることにしましょう。

最高法院で主イエスが裁判を受ける場面について、先に「人々はずっとおしゃべりを続けていた」と指摘しましたが、その中には、目を覆いたくなるような人間の立ち振る舞いが記されています。^{わるだく}悪巧みが暗躍していました。

しかし、聖書は、人間の墮落や挫折など、悪いことが全部含まれているような場面で、神の恵みが世々ますます大きなものであることを告げています。K.バルトは、「悪はこの世では大きい、善はそれ以上に大きい」ということが、まさに主イエスの受難において明らかになったのではない

か、と述べています。私たちはしばしば、この世の悪や自分の罪が大変大きく見えて、それらをはるかに超えて神の恵みは大きいのだということを信じられなくなります。そのような私たちに対し、「善はそれ以上に大きい」という確信が揺らがないように、神からの私たちへの最大・無二の恵みが、主イエス・キリストの十字架と復活によってあらわされたのです。

マタイ福音書26:57——

人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアファのところへ連れて行った。そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。

主イエスを苦しめたのは、あらゆる人であると、信仰的には言えますが、あらゆる人の先頭に立ち、また他の人を影で動かしているのは、大祭司、律法学者、そして長老です。すなわち、本来、地上の正義をつかさどる者たちがその権威を振りかざしています。使徒信条にも「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と、当時のローマ総督の名が挙げられています。とりわけ大祭司、律法学者、そして長老は、神または神の律法に、自分たちは「熱心」である（詩編69:10、ヨハネ2:17）と考えて、公的な権威を濫用していることに気づいていません。

社会的地位の高い人だけが、というよりも、彼らに代表されるように、多くの人陥りやすい「権威を振り回す」という大きな罪が、ここに暴き出されています。

マタイ福音書26:63——

イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」

大祭司はいらついている様です。被告の口を割らせようと誘導尋問しています。

先の二人の証人の「神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てる」（マタイ26:61）にせよ、この「お前は神の子、メシア」せよ、はからずも信仰告白になっています。しかし、主イエスは十字架を見据え、また、言葉や説き明かしを尽くしても今は回心しないであろう彼らの心を見抜いて、黙っておられました。

黙るということ思い出さす一つのエピソードは、洗礼者ヨハネの誕生物語です。

ルカ福音書1:20 天使ガブリエルがザカリアに告げた言葉——

「あなたは口が利けなくなり（マタイ26:63の「黙る」と同一原語）、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

自分と妻との歳としのことで、ザカリアは天使の言葉に疑ってかかりました。そこで、妻エリサベトが懐妊し出産するまで、天使はザカリアの口を閉ざしました。しかし、それは、神の奇跡を信じない者への懲罰ちようばつというよりも、一年近くの沈黙、すなわち、熟考の時を、神がザカリアに備えられたのではないのでしょうか。この期間こそ、神の御心を尋ね、どのように主イエスの先駆者となる長子・ヨハネを育てるか、について思い巡らす前備えの時となったのです。それは、時が熟するのを待つ沈黙でした。

それでは、「イエスは黙り続けておられた」ことの意味は、いったい何なののでしょうか？

後に出て来るマタイ26:64の「それは、あなたが言ったことです」という主イエスの受け答えも、「黙り続ける」主イエスの姿をあらわしています。「あなたが言ったこと」が正しいとも正しくないとも、表明されていません。

K.バルトは、この裁判の場面で「イエスが沈黙されたのは、イエスが悪意に言葉を持って打ち勝つことはできないと洞察されたからである」と説明しています。考えてみれば、人類史上最低の「悪意」と言えども、神の知恵と正義において、主イエスが御言葉により打ち負かすことは、いとも簡単であったことでしょう。しかしここでは、主イエスは黙ることを選び取られました。次元は違うかもしれませんが、私たちも言葉の連発や氾濫の中で、言葉を返すことの虚しさを感じる場合があります。

主の沈黙は、その時を待っていたのです。今すぐにも、カルバリの丘に上げられた主イエス・キリストを通じ、天より「十字架の言葉」が激しく下ります。人間のすべての悪口あざけや嘲りが「十字架の言葉」に打ち負かされます。

裁判の席上、主イエスの沈黙はただ「待つ」だけであったかと言えば、そうではありません。主イエスは黙しつつ、何を熟考されていたのでしょうか？

ゲツセマネの出来事（マタイ26:36-46）が直前に置かれています。すなわち、主イエスは父なる神に祈ったうえで、逮捕され、裁判にかけられて

います。そうであるならば、この時、主イエスはゲツセマネの祈りを祈り続けておられるのではないのでしょうか。

マタイ福音書26:42——

更に、二度目に向こうへ行って（イエスは）祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」

主イエスは、ゲツセマネの祈りに引き続いて、神の御心を問い、考え抜かれていたのではないかと思います。

十字架による救いを待つ時、黙する時、熟考する時が刻一刻と過ぎて行きました。その中で、私たち・罪人を救い出そうとされている主イエスの忍耐強さが際立たされると同時に、夜の闇に潜んでいる人間の罪深さが、次々に照らし出されます。

マタイ福音書26:65——

そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。」

ここで、最高法院での裁判における人間の罪深さについて、箇条書きに整理してみましょう。

①先に結論（極刑！）ありき、でありました。イエスを罪に定めると決めていたのです。従って、手続きは単なる「形」でした。夜中でも何でも構わない、結論に持つて行くことが大事でした。反論や弁明を聴く気持ちは心底ありませんでした。

②徒党を組んでいます。祭司、律法学者、長老、最高法院のメンバー、さらに次の場面を含めれば、ローマ総督（マタイ27:1）までも。普段は、あまり仲が良くないであろう者たちが一致団結しています。東^{たば}になり、イエスを打ちのめそうとしています。

③他の人々を巻き込もうとしています。自分たちの側へ同調させようと企んでいます。元来、「服を引き裂く」ことは悔い改めまたは悲嘆のしるし（創世記37:29、ヨブ記1:20、2:12）にほかなりませんが、ここでは会衆の喝采につけいるスタンドプレーになっています。このような派手な行為を見せつけられると、ほんとうに大祭司が正しいのかなと思ひ込んでしまいます。

④自分たちは「正しい」という立場からイエスを裁いています。すなわ

ち、自分たちの正しさは、神の律法に拠っているという点で、彼らは頑固^{がんこ}です。実際に聖書が開かれているわけではありませんが、大祭司が主イエスの罪過を「神を冒瀆した」こととして、死刑に処しているのは、明らかにレビ記24:15-16に拠っています。自分たちは権威を帯びているうえに、さらに律法^{のつと}の書をいう権威の書に忠実であり、権威ある判決を下している、と彼らは考えていることでしょう。しかし、彼らは神を見上げるという思いからは遠く、自らの正義においてがんじがらめになっています。「律法に則^{のつと}って」正しく生きることには限界があるのです（ガラテヤ3:11）。

イスカリオテのユダ^{せつぶん}の接吻や「先生、こんばんは」（マタイ26:49）という日常性に隠された罪と共に、①～④のような人間の重大な罪がからみ合っ^て、主イエスを十字架に追いやったのです。

沈黙において神の御心を考え抜かれた主イエスは、次のように語られて^います。

マタイ福音書26:64——

イエスは言われた。「それは、あなたが言ったことです。しかし、わたしは言っておく。

あなたたちはやがて、

人の子が全能の神の右に座り、 →詩編110:1

天の雲に乗って来るのを見る。」 →ダニエル書7:13

「しかし」以下は、直訳風に「それどころか、それをさらに越えて、わたしは言う」とした方が、この世のおしゃべりに対する、御言葉の力がより明瞭になります。そうして、詩編110:1とダニエル書7:13に基づく告知があったのです。これはやや謎めいた預言ですが、主イエス・キリストの復活または再臨を示しています（J.シュニーヴィント）。

今は十字架への道の渦中で、ほとんどの人々は主イエスを磔^{はりつけ}にしようといきり立っていますが、この復活と再臨の告知には、彼らこそ救われるべき罪人たちであるという主イエスの愛があらわされています。沈黙と背中合わせの語りにおいて、主イエスは悔い改める者に向けて、永遠の命への道を説かれています。

ここから、今日の説教のまとめに入ります。

マタイ福音書26:61——

（二人の証人の言葉）「この男は、『神の神殿を打ち倒し、三日あれ

ば建てることができる』と言いました」と告げた。

この「不利な証言」に対し、「イエスは黙り続けておられた」と記されて、この証言が正しいのか正しくないのか、についてはマタイ福音書の中で明確になっていません。

ここで言え得ることは、次のような意味で理解することは間違っているということです。すなわち、主イエスが当時、存在していたエルサレム神殿をハンマーか何かでもって破壊して、三日間で建設するという実際の行為に関わるものとしては解せません。そうではなく、「神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てる」という言葉を、信仰的に受け止め、かつ、これを主イエス・キリストの十字架と復活の御業に関わるとする理解こそ正しいのです。

端的に言えば、これは、「神の子、メシア」への預言です。主イエスご自身が神の神殿、神の聖なる宮として十字架により打ち倒され、死を遂げられる、そして、三日後に、建て直される、よみがえらされるという言葉として、二人の証言は真実であります。

説教後にうたう讚美歌Ⅱ編185番「カルバリ山の」に、「いまよりわれをきよき宮とし」という句があります。ここには、私たち・信仰者が神に潔められて、神の神殿（その一部）となるという、まことにありがたい詞が出ています（I コリント3:16）。これは何よりも、主イエスご自身が十字架の苦難の中から復活し、代々の教会を通し神の神殿を私たちのために打ち立ててくださったからです。

自分が神の神殿であること信じて生きていきなさい、ということは、神を拝むことを生活の中心に置きなさい、つまり、礼拝しなさいということです。

最後のもう一度問いますが、なぜ、主イエスは「黙り続けておられた」のでしょうか？

主イエス・キリストは、神の御心に従って沈黙なされたのでありましょう。そして、それは、神の御心は変わらないという宣言を意味しています。人間がどんな計略を企んだとしても、罪からの救い、罪を背負い取り去る御業（I ヨハネ3:5）は成し遂げられます。

この夜が明けて、主イエス・キリストは十字架につけられます。そして、三日目によみがえられます。神の御心と御業は変わりがありません。

「小鳥は森に沈黙している」

真夜中、あらゆる被造物が静止する時

我が罪を熟考・内省し、神を讃美する呼吸を調べて憩う
そうして、新しい朝を迎え、御言葉を読み、神に奉仕する
そのような一週間であるよう祈りましょう。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 436

2016年9月25日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二